

2. 日本語教育部門

日本語研修コース報告（2008年4月～2009年3月）

後藤 寛樹

1 はじめに

大学院入学前予備教育日本語研修コースは、主として、文部科学省によって配置される大使館推薦国費研究留学生および教員研修留学生を対象とした日本語集中コースで、毎年4月と10月に開講し、各期15週75日間のコースを提供している。富山大学留学生センターでは、1999年10月に第1期を開講し、2009年3月には第19期生を送り出した。富山大学に配置される国費研究留学生の数は少なく、受講定員に余裕があるため、2000年10月開講の第3期日本語研修コースからは、学内公募を実施して、大学推薦国費研究留学生や私費研究生等も受け入れている。本稿では、2008年4月から開講した第18期と同年10月から開講した第19期について報告する。また、2008年7月に実施した留学生受け入れ指導教員に対するニーズ調査の結果についても述べる。

2 受講者

第18期は、文部科学省から大使館推薦国費研究留学生1人の配置があり、さらに学内公募による私費留学生10人が参加し、合計11人の学生が受講した。第19期は、文部科学省から大使館推薦国費研究留学生1人、教員研修留学生1人の配置があり、さらに学内による大学推薦の国費留学生や私費留学生3人が参加し、合計5人が受講した。各期の受講者は表1の通りである。10月開講の期は、日韓プログラムの予備教育生も、本コースの一部の授業を受講することになっているが、今年度は配置がなかった。

表1 日本語研修コース受講者（第18期・第19期）

期	名 前	国 籍	指 導 教 員
18	アラ エルディン タウフィク レファト	エジプト	富山大学 濟木 育夫 教授
	趙 佳 (チョウ カ)	中 国	富山大学 森口 毅彦 准教授
	張 麗 (チョウ レイ)	中 国	富山大学 馬 駿 准教授
	陳 坤 (チン コン)	中 国	富山大学 唐 政 教授
	王 学 (オウ ガク)	中 国	富山大学 王 大鵬 准教授
	孫 美 蘭 (ソン ミラン)	中 国	富山大学 内田 康郎 教授
	鮑 旻 琮 (ホウ ミンシュウ)	中 国	富山大学 馬 駿 准教授
	張 会 文 (チョウ カイブン)	中 国	富山大学 李 瑞雪 准教授
	馬 念 念 (バ ネンネン)	中 国	富山大学 馬 駿 准教授
	張 丹 (チョウ タン)	中 国	富山大学 王 大鵬 准教授
	劉 佳 溢 (リュウ カイツ)	中 国	富山大学 志津田一彦 教授
19	ラフマル アブデルアジズ	モロッコ	富山大学 久保田真功 准教授
	ディプエ ディヤ フィタ エディ	コンゴ民主共和国	富山大学 門田 重利 教授
	ポーンティップ ワイウット	タ イ	富山大学 濟木 育夫 教授
	衡 丹 丹 (コウ タンタン)	中 国	富山大学 堀田 裕弘 教授
	趙 丹 青 (チョウ タンセイ)	中 国	富山大学 堀田 裕弘 教授

※第19期開講当初は、私費研究生がもう1人受講していたが、体調不良による欠席が続き、コースについていくのが困難になったため、指導教員とコーディネーター、受講者本人の三者で相談した結果、受講を辞退することとなった。

※指導教員の職名は、それぞれコース修了時点の職名を記してある。

3 コース担当者

第18, 19期ともに, センター専任教員5人(加藤扶久美, 出原節子, 副島健治, 濱田美和, 後藤寛樹)と, 非常勤講師6人(岩本阿由美, 中河和子, 藤田佐和子, 松岡裕見子, 要門美規, 横堀慶子)が授業を担当し, 後藤寛樹がコーディネートを担当した。

4 コーススケジュール

第18期は, 2008年4月9日(水)に開講式, 同年9月8日(月)に修了式を, 第19期は, 2008年10月9日(木)に開講式, 2009年3月2日(月)に修了式を行い, どちらの期も15週75日間の集中授業を行った。各期の主なスケジュールは以下の通りである。

<第18期>

2008年4月3日(木) 文科省配置学生:オリエンテーション
4月4日(金) 文科省配置学生:諸手続き(外国人登録, 口座開設)
4月7日(月) 学内公募選考
4月8日(火) 学内公募受講生:オリエンテーション
4月9日(水) 開講式
4月11日(金) 授業開始
5月14日(水) 異文化交流パーティー
5月30日(金) フィールドトリップ(富山市民俗民芸村・五百羅漢)
6月27日(金) 「私の国」発表会
7月12日(土) ホームビジット
7月31日(木) ~8月31日(日) 夏季休業
9月2日(火) スピーチ発表会(「私の専門」発表会)
9月8日(月) 修了式

<第19期>

2008年10月7日(火) 文科省配置学生①:オリエンテーション
10月8日(水) 文科省配置学生①:諸手続き(外国人登録, 口座開設)
文科省配置学生②:諸手続き(外国人登録)
学内公募選考
10月9日(木) 開講式
文科省配置学生②:オリエンテーション, 手続き(口座開設)
学内公募受講生:オリエンテーション
10月14日(火) 授業開始
11月5日(水) 異文化交流パーティー
11月21日(金) フィールドトリップ(富山市民俗民芸村・五百羅漢)
12月23日(火) ~2009年1月4日(日) 冬季休業
2009年1月9日(金) 「私の国」発表会
1月24日(土) ホームビジット
2月17日(火) スピーチ発表会(「私の専門」発表会)
3月2日(月) 修了式

5 コース内容

授業は原則として月曜日から金曜日まで1日4コマで、日本語と日本事情、コンピュータを中心とした内容で行った(表2, 3参照)。2007年度は、初級クラスの文法10コマ中6コマ、中級クラスの文法10コマ中4コマが日本語課外補講の授業と合同で開講されていたが、2008年度からさらに初級クラスの聴解1コマ、中級クラスの文法4コマ、聴解、会話各1コマが日本語課外補講と合同で開講されることとなり、合同で開講されるクラスが増えた。通常の授業の他に、学生の個人の習熟度やニーズに合わせた指導を行うために、特別指導も行った。コース後半からは、専門課程への橋渡しの教育として、自分の専門についての口頭発表とレポート作成を行う「私の専門」プロジェクトも課した。

クラス構成としては、第18期は、受講者を日本語能力に応じて初級と中級の2つのレベルに分け、さらに中級クラスは受講者数も多く、日本語能力に開きがあったことから、部分的に2つの能力別クラスに分けて授業を行った。これに対応するために、一部の授業で学生は日本語課外補講で開講されている授業に出席した。第19期は、中級レベルに該当する受講者がいなかったため、初級レベルのみ開講したが、午後の技能別クラスについては学生を2つのクラスに分けて授業を行った。

5.1 時間割

表2 第18期日本語研修コース時間割

	1 (8:45~10:15)			2 (10:30~12:00)			3 (13:00~14:30)			4 (14:45~16:15)		
	初級	中級1	中級2	初級	中級1	中級2	初級	中級1	中級2	初級	中級1	中級2
月	文法 (岩本)	文法 (松岡)	文法 (岩本)	文法 (松岡)	聴解 (濱田)	作文 (副島)	作文 (加藤)	コンピュータ (濱田)	文法 (副島)			
火	文法 (*)	聴解 (濱田)	文法 (*)	会話 (加藤)	会話 (後藤)	作文 (藤田)	文法 (副島)	コンピュータ (濱田)	特別指導 (濱田・後藤)	読解 (*)		
水	文法 (要門)	文法 (中河)	文法 (要門)	文法 (中河)	会話 (後藤)	文字・漢字 (濱田)	日本事情 (出原)					
木	文法 (*)	文法 (岩本)	文法 (*)	文法 (岩本)	コンピュータ (後藤)	文法 (副島)	文字・漢字 (副島)	文法 (加藤)	コンピュータ (後藤)			
金	文法 (横堀)	文法 (要門)	文法 (横堀)	文法 (要門)	読解 (横堀)	読解 (後藤)	特別指導 (加・副)	特別指導 (加藤・副島)	特別指導 (濱・後)			

※ () 内にアスタリスクが記載された科目は、日本語課外補講で開講されている授業に出席した。
 ※網かけのクラスは日本語課外補講と合同で開講されるクラスである。

表3 第19期日本語研修コース時間割

	1 (8:45~10:15)		2 (10:30~12:00)		3 (13:00~14:30)		4 (14:45~16:15)	
	初級	初級	初級1	初級2	初級1	初級2	初級1	初級2
月	文法 (岩本)	文法 (岩本)	聴解 (濱田)	聴解 (加藤)	コンピュータ (濱田)			
火	文法 (副島)	文法 (副島)	作文 (藤田)	作文* (後藤・加藤)	特別指導 (加藤・副島)	特別指導 (濱田・後藤)		
水	文法 (要門)	文法 (要門)	会話 (後藤)	会話 (副島)	日本事情 (出原)			
木	文法 (加藤)	文法 (加藤)	コンピュータ (後藤)		文字・漢字 (後藤)	文字・漢字 (副島)		
金	文法 (横堀)	文法 (横堀)	コンピュータ (後藤)	読解* (後藤・副島)	特別指導 (濱田・後藤)	特別指導 (加藤・副島)		

※アスタリスク付きの科目は、学生の習熟度に合わせて、クラスを分けて授業を行った。
 ※網かけのクラスは日本語課外補講と合同で開講されるクラスである。

5.2 日本語科目

初級クラスでは、基本的な日本語文法を習得し、運用できるようになること、文字についてもひらがなやカタカナ、基本的な漢字を習得することを目的として授業を行った。中級クラスでは、これまでに身につけた文法や語彙の知識をもとに、中級レベルの文法や語彙を習得し、運用力をつけることを目指して授業を行った。さらに、初級の文法事項の復習や整理の時間も設け、基礎力の補強も行った。

また、正しい日本語の発音を身に付けるための指導も、独自開発教材を用いて行った。

各クラスで使用した教科書等は以下の通りである。

初級クラス

主教材 『みんなの日本語』初級Ⅰ，Ⅱ（スリーエーネットワーク）

『かなマスター』（専門教育出版），『Basic Kanji Book』Vol.1，2（凡人社）

『毎日の発音練習』（独自開発テキスト）

副教材 『みんなの日本語 初級で読めるトピック25』『みんなの日本語 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級 やさしい作文』（スリーエーネットワーク），『わくわく文法リスニング99』（凡人社），『クラス活動集101』『クラス活動集131』（スリーエーネットワーク），『絵とタスクで学ぶにほんご』（凡人社），『にほんごきいてはなして』（ジャパントイムズ），『楽しく聞こう』『楽しく話そう』（凡人社）など

中級クラス

主教材 『文化中級日本語』Ⅰ，Ⅱ（文化外国語専門学校）

『みんなの日本語』初級Ⅱ（スリーエーネットワーク）

『初級日本語文法総まとめポイント20』（スリーエーネットワーク）

『中級日本語文法要点整理ポイント20』（スリーエーネットワーク）

『新・毎日の聞き取り50日ー上ー』（凡人社）

『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』（スリーエーネットワーク）

『話せる日本語 360枚のカードで学ぶ中級会話』（アルク）

『Intermediate Kanji Book』Vol.1（凡人社）

『毎日の発音練習』（独自開発テキスト）

5.3 日本事情

学内から国際交流学生ボランティアとして募集した日本人学生との交流・活動を通して、日本社会について学び、さらには習得した日本語を実際に使う機会を提供する。

また、留学生と日本人学生が共に自国の言語や文化に対する関心を高め、異文化を理解し、異文化コミュニケーション能力を養うことを目指す。

5.4 コンピュータ

この授業では、留学生が日本語環境でコンピュータの基本的な操作をすることができ、ひらがなやカタカナ、さらに漢字なども使って、正しい日本語の入力ができるようになることを目指す。また、あわせて、大学での勉学に必要な基本的な情報リテラシーの習得も目指している。

留学生には、日本語のコンピュータ用語が漢字語やカタカナ語が多いために難解であること、促音や拗音などの特殊音の入力が難しいなど、特有の問題があるが、それを克服できるように指導することが大きな目的である。また、専門課程での勉学に備えて、ワープロソフトや表計算ソフト、プレゼンテーションソフトなどを使えるようになることも目指し、同時に日本語での電子メールの書き方、インターネットの使い方、およびそれに付随する著作権やセキュリティ対策などについても指導を行った。

〔使用テキスト〕 『日本語学習者のためのアカデミックインフォメーションリテラシー』

（独自開発テキスト）

5.5 口頭発表プロジェクト

5.5.1 口頭発表プロジェクト

日本語研修コースに在籍する留学生は、その多くが大学院へ進学する予定の学生であり、コースが始まって半年後にはそれぞれの専門課程に進んで専門の勉強や研究を始めなければならない。本コースでは、留学生がそれらの活動を効率的に進められるように、スピーチ発表会で自分の専門の内容について、これまで学んできたこと、これから大学院で学びたいことを簡単に説明する口頭発表を行い、さらにレポートにまとめるというプロジェクトを学生に課している。教員研修留学生には、自国の教育制度を説明し、富山大学で学びたいことについて話すという課題を課している。この活動は、一般日本語、コンピュータ、そして専門の学習が一体となって行われるものである。

具体的には、留学生は自分の専門について、専門用語を調べたり、必要な情報をインターネットなどから得たり、あるいは必要に応じて所属研究室の指導教員や学生に質問したりした上で、作文の時間に発表原稿を作成する。また、コンピュータの時間には、プレゼンテーションソフトを使用してスライドを準備する。その後練習を重ね、最終的には、コース修了前に開催されるスピーチ発表会で、作成したスライドを示しながらプレゼンテーションを行った(5.5.2参照)。さらに、学生は発表原稿を元にしてレポートを作成し、そのレポートをまとめて、研修コース修了レポート集『らいちょう』として発行した(5.5.3参照)。

5.5.2 スピーチ発表会

スピーチ発表会は、第18期は2008年9月2日(火)に、第19期は2009年2月17日(火)に、それぞれ午後1時半より開催した。第18期は21人、第19期は24人の出席者があった。出席者は学生の指導教員やセンターに関係のある教員、学務部学生支援グループ留学支援チーム職員、ホストファミリー、富山大学の日本人学生などである。

留学生は、発表会に向けて、指導教員、同じ研究室の先輩留学生、日本人学生に協力してもらいながら熱心に準備を進めた。授業時間以外にも発表の原稿をチェックしたり、教員が原稿を朗読しテープに吹き込んだものを作成して学生に渡すなどして、指導にあたった。

5.5.3 修了レポート集作成

スピーチ発表会で口頭発表を行った原稿をもとにレポートを作成し、修了レポート集『らいちょう』として発行した。留学生は各自の専門についてのレポートを作成した他、それぞれの期の中表紙、寄せ書き、写真のページなどを共同で作成した。学生たちは、各自の能力を発揮し、話し合いを進めながら、コンピュータの授業で学んださまざまな文書の作り方などを能率良く活かし、完成度の高い文集を作り上げた。

6 成績評価

初級クラスでは、メインテキスト(『みんなの日本語』)に基づく定期試験および文字・漢字の試験を実施し、中級クラスでは、メインテキスト(『文化中級日本語』)に基づく定期試験を実施し、聴解、会話、漢字のクラスでもそれぞれ試験を実施した。また、口頭発表プロジェクトについても、原稿と発表会当日の発表を教員が採点し、プロジェクトの成績を出した。コース修了時に、定期試験、その他の試験、口頭発表プロジェクトの成績を総合して、コース全体の成績判定を行い、コースへの出席率も含めた成績表を作成して、受講者本人と指導教員へ通知した。

7 コース評価

日本語研修コースでは、コース改善に役立てるために、コース終了時にコースエバリュエーションの

アンケートを行っている。実施前に、成績等には全く影響しないことを伝えた上で、授業の内容、テキスト、教師の教え方、コンピュータ授業、口頭発表プロジェクト、日本人学生との時間、ホームステイ・ホームビジットについて、調査を行った。それぞれの期のコース評価の結果を表4、表5に示す。なお、回答方法は、5段階で評点をつけるものと、与えられた選択肢から該当する答えを選択するものがあるが、回答結果については後者の結果のみを掲載している。また、自由意見は日本語または英語で記入させ、英語から日本語への翻訳、日本語の訂正はコーディネーターが行った。

表4 第18期コース評価

質問及び回答結果	自由意見
<p>(コース全体)</p> <p>コースは役に立ったか：5段階評点 スケジュールはどうだったか： 忙しすぎる1人、忙しい6人、 ちょうどいい4人 日本語は上達したか： した5人、普通6人</p>	
<p>(日本語の授業)</p> <p>授業はどうだったか：5段階評点 教科書はどうだったか：5段階評点 ハンドアウトはどうだったか：5段階評点 教師の教え方はどうだったか：5段階評点</p>	
<p>(テスト)</p> <p>テストはどうだったか：5段階評点 テストは多かったか： 多い5人、ちょうどよい3人、少ない3人</p>	
<p>(コンピュータ授業)</p> <p>日本へ来る前に コンピュータを使ったことがあるか： ある11人 メールやインターネットを使ったことがあるか： 両方11人 どんなソフトウェアを使っていたか： MS Word 11人、MS Excel 10人、 MS PowerPoint 10人 日本語環境で使ったことがあるか： ある4人、ない7人</p> <p>授業は役に立ったか：5段階評点 テキストはどうだったか：5段階評点 教え方はどうだったか：5段階評点</p>	

<p>(口頭発表プロジェクト)</p> <p>プロジェクトはたいへんだったか： たいへん8人，ふつう3人</p> <p>プロジェクトは役に立ったか：5段階評点 発表会は役に立ったか：5段階評点</p>	
<p>(見学) 参加した10人の回答</p> <p>見学は楽しかったか： はい9人</p> <p>いいえ1人</p> <p>見学場所は適当だったか： はい8人，いいえ2人</p> <p>見学の時期は適当だったか： はい8人，いいえ2人</p>	<p>(どんなところが楽しかったか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・売薬資料館 ・日本の文化や富山の歴史を理解したこと ・日本の文化を体験できた ・日本の文化をより理解できた ・全部 <p>(どんなところが楽しくなかったか) 回答なし</p> <p>(「いいえ」の場合：どんなところに行きたいか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の文化がよりはっきり表れているところ <p>(「いいえ」の場合：いつ行きたいか) 回答なし</p>
<p>(ホームビジット)</p> <p>ホームビジットは楽しかったか： はい11人</p> <p>ホームビジットの時期は適当だったか： はい11人</p>	<p>(どんなところが楽しかったか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人と話したり，日本の普通の生活を理解したりしたこと ・日本人の生活が理解できたこと ・日本的な活動が楽しかった ・日本人の日常生活を体験した
<p>(日本事情)</p> <p>日本人と一緒に勉強するのはどうだったか：</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人学生はとても親切だ。 ・日本人と一緒に勉強するのはいいと思うが，交流が少ないし，内容がよくない。 ・日本人と一緒に勉強することはよかったと思う。 ・よかった。 ・日本人の若者の考え方を理解するのにいい。 ・とてもいいと思う。

<p>日本の文化を知らなければならぬと思うか： 思う10人</p> <p>思わない1人</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった。(3人) ・楽しかったが、日本人の数が少ない。 <p>(どうしてそう思うか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界には異なる文化があるから。 ・日本で留学生活を送るためには日本文化を知った方がいい。 ・日本にはいろいろなマナーがあるから。 ・「郷に入っては郷に従え」だから。(2人) ・「郷に入っては郷に従え」だから。そして、異文化の交流を大切にしたい方がいい。 ・日本の文化を理解したら、日本語をよく勉強できると思う。 ・留学は学びながら、視野を広げることだから。 ・日本の文化を知ったら、今後の勉強にいいと思う。 ・日本で生活するので、日本の文化を知ったら、生活がもっと便利になる。 <p>(どうしてそう思うか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すべてを知る必要はない。外国人には自分の文化や習慣があるから。
---	--

表5 第19期コース評価

質問及び回答結果	自由意見
<p>(コース全体)</p> <p>コースは役に立ったか：5段階評点 スケジュールはどうだったか： 忙しすぎる1人、忙しい3人、 ちょうどいい1人 日本語は上達したか：した4人、普通1人</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・忙しいスケジュールだが、役に立つ。楽しかった。
<p>(日本語の授業)</p> <p>授業はどうだったか：5段階評点 教科書はどうだったか：5段階評点 ハンドアウトはどうだったか：5段階評点 教師の教え方はどうだったか：5段階評点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい
<p>(テスト)</p> <p>テストはどうだったか：5段階評点 テストは多かったか： 多い3人、ちょうどよい2人</p>	

<p>(コンピュータ授業)</p> <p>日本へ来る前に コンピュータを使ったことがあるか： ある5人</p> <p>メールやインターネットを使ったことがあるか： 両方5人</p> <p>どんなソフトウェアを使っていたか MS Word 5人, MS Excel 5人, MS PowerPoint 5人</p> <p>日本語環境で使ったことがあるか ある1人、ない4人</p> <p>授業は役に立ったか：5段階評点 テキストはどうだったか：5段階評点 教え方はどうだったか：5段階評点</p>	
<p>(口頭発表プロジェクト)</p> <p>プロジェクトはたいへんだったか： たいへん1人, ふつう2人, かんたん2人</p> <p>プロジェクトは役に立ったか：5段階評点 発表会は役に立ったか：5段階評点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時間が短かった。 ・準備の時間はもう少し長い方がいい。
<p>(見学)</p> <p>見学は楽しかったか： はい5人</p> <p>見学場所は適当だったか： はい5人</p> <p>見学の時期は適当だったか： はい5人</p>	<p>(どんなところが楽しかったか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の文化がよくわかる。 ・日本の文化を見ることができた。 ・いろいろな日本文化を習ったし、友達ができた。 ・みんなで一緒に写真を撮った。 <p>・毎月1回行きたい。</p>
<p>(ホームビジット) 参加した4人の回答</p> <p>ホームビジットは楽しかったか： はい4人</p> <p>ホームビジットの時期は適当だったか： はい4人</p>	<p>(どんなところが楽しかったか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人はとても親切だし、日本語の練習ができた。 ・日本文化を勉強した。 ・日本料理を食べたり、ホテルイカを見たりした。 ・滑川市のホテルイカを見た。

<p>(日本事情)</p> <p>日本人と一緒に勉強するのはどうだったか：</p> <p>日本の文化を知らなければならないと思うか： 思う5人</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・とても役に立った。 ・とても大切だ。 ・ありがとうございました。 ・役に立ったし楽しかった。日本語を勉強したり、折り紙を習ったり、日本文化を習ったり、日本人の友達ができたりした。 ・とてもおもしろかった。 <p>(どうしてそう思うか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこに住んでいても、そこが自分の場所になるから。 ・日本に住んでいるから、日本の文化を知ることが大切。 ・文化はそれぞれ異なるから。 ・さらに日本人と交流できるし、たくさん日本人の友達ができるから。 ・たくさん勉強しなければならないと思う。
---	--

このコースは1日4コマ、75日間の集中コースということもあり、受講者の中には研究活動を同時に進めながら受講している留学生がいるため、どうしてもスケジュールが忙しいととらえられてしまう傾向がある。とはいえ、第18、19期ともに、コースは役に立ったかという問いに対して、5段階評価でも平均4.7以上の回答が得られていることから、受講者のコースへの満足度は高かったと言ってよいだろう。自己の日本語の上達度についての問いに、多くの学生が「上達した」と答えており、この点からも受講者のコースへの満足度の高さがうかがえる。

日本語の授業やテストについての問いでは、教科書およびテストに対する18期の受講者の評価がやや低くなっていた。主に中級クラスの受講者の評価が低かったことによるが、これは2008年度から中級クラスは午前中のすべての授業が日本語課外補講との合同クラスとなったことによって、授業の進め方などがこれまでと大きく変わったことが影響していると考えられる。今後も、中級クラスは同様の形態で開講することになるので、どちらのプログラムの受講者にとっても有益な授業内容が提供できるように、日本語課外補講のコーディネータや中級クラスの授業担当者とも連携をはかりながら、使用教科書の選定、授業スケジュールの立案等、指導の内容を検討していく必要がある。

コンピュータの授業や口頭発表プロジェクトについても、概ね高い評価を得ている。最近では、来日前に既に母語環境あるいは英語環境のコンピュータを使いこなしている留学生がほとんどであるが、それでもコンピュータの授業への評価は高く、それだけ日本語環境でのコンピュータの使用は留学生にとって困難を伴うものだと言えるだろう。口頭発表プロジェクトは、それぞれの専門について日本語で説明するというプロジェクトであるが、短期間で準備をしなければならないため、それが大変だととらえられているようである。特に、第19期はスケジュールの都合で準備期間がいつもの期よりも短かったこともあり、自由記述でも「準備の期間はもう少し長い方がいい」という回答が得られた。今後は学生の負担が少しでも少なくなるように、スケジュールの調整を行う必要がある。

見学、ホームステイ・ホームビジット、日本事情についても概ねいい評価が得られた。特に、教室以外の場で習った日本語を使ってコミュニケーションをしたり、日本の文化や若い日本人の考え方について

て学ぶ機会があったことについて、よかったと感じているようである。日本事情については、第18期の受講者の回答に「日本人学生の数が少ない」という記述が見られる。第18期は受講者の数が比較的多く、そのことも日本人学生の少なさを感じる要因となっていると思われる。日本人学生は、国際交流学生ボランティアという形でこの授業に参加しているが、彼らにとっては単位の出ない授業であることなどもあって、異文化理解や留学生との交流に関心を持つ学生を多数確保するのは難しい状況がある。しかし、留学生にとっては、身につけた日本語でコミュニケーションをする場であったり、それぞれの文化について相互に理解し合うのによい場であるにとらえられているので、国際交流学生ボランティアの募集をどのように行い、このような活動に関心を持つできるだけ多くの日本人学生をどのようにして確保していくかということも検討していかなければならないと言えよう。

8 富山大学留学生受け入れ指導教員に対するニーズ調査

第1章でもふれたように、富山大学に配置されてくる文部科学省からの国費研究留学生および教員研修留学生の数は極めて少なく、ここ数年は0～2人の間で推移している。そのため日本語研修コースでは、学内公募を実施して受講者を募っているが、それでも、受講者数が多くない期もある。また、各学部の研究生受け入れ方針にも変化が見られ、研究生として富山大学に在籍する新規の留学生の数は前期に多く、後期は少ないという状況にある。今後も同様の状況が続くことが予想され、研修コースとして開講するクラスのレベルや数を検討する必要があると考えられる。そこで、学内の留学生受け入れ指導教員に対して、日本語研修コースに対するニーズ調査を実施した。本章ではその結果について報告する。

8.1 調査対象者と調査方法

調査は、過去5年間に日本語研修コースを修了した留学生の受け入れ指導教員34人と、日本語研修コースは受講していないが、過去3年間に研究生として留学生を受け入れた実績のある指導教員28人の合計62人を対象として、2008年7月に実施した。質問用紙を送付し、記入してもらうという形をとった。42人の教員から回答が得られ、回収率は67.7%であった。質問項目は、教育・研究活動での使用言語、留学生にとって必要な日本語能力についての指導教員の意識、日本語研修コースへのニーズの3つに分けられる。本稿では、留学生にとって必要な日本語能力についての指導教員の意識と日本語研修コースへのニーズの2つについてまとめる。

回答者の所属部局と専門分野を表6、7に示す。

表6 回答者の所属部局

部局	経済	理	医	薬	工	その他	合計
人数	9	4	8	7	12	2	42

経済：経済学部，理：理工学研究部（理学領域），医：医学薬学教育部（医学領域），薬：医学薬学教育部（薬学領域），工：理工学教育部（工学領域）
 その他：極東地域研究センター，和漢医学総合研究所，各1

表7 回答者の専門分野

分野	人文系	社会系	理学系	医学系	薬学系	工学系	合計
人数	1	8	5	8	8	12	42

8.2 留学生にとって必要な日本語能力についての指導教員の意識

受け入れた留学生の大学生活における日本語能力の必要度を指導教員がどのように意識しているかについて見るために、大学における諸手続き、日常生活一般、研究室でのコミュニケーション、研究活動の各場面で日本語がどの程度必要と考えているかを尋ねた。研究活動については、論文作成、口頭発表、専門書・論文の講読、ゼミ・授業への参加、その他の5つの場面を設定した。それぞれの場面に対して、回答者が考える日本語能力の必要度を「必須」「できた方がよい」「少しできればよい」「必要ない」の4段階で判定してもらった。表8～10に人文・社会系、理工系、医薬系の3つの分野別に見た回答結果を示す（最も多かった回答を網かけで示した）。

人文・社会系の専門分野では、すべての場面において約9割以上の指導教員が日本語は「必須」または「できた方がよい」と答えており、全体的に日本語能力の必要度は高いと考えられていることがわかる（表8）。これは、人文・社会系の場合、講義やゼミは日本語で行われるのがほとんどであること、また、論文の作成や口頭発表なども日本語でなされることに起因していると思われる。研究活動のその他として、「TAなど（できた方がよい）」「就職活動（必須）」「調査（必須）」が挙げられていた。

表8 指導教員が考える留学生の日本語能力必要度（人文・社会系）

	必須	できた方がよい	少しできればよい	必要ない	無回答
大学における諸手続き	6(66.7%)	3(33.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
日常生活一般	5(55.6%)	4(44.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究室でのコミュニケーション	4(44.4%)	5(55.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究活動（論文作成）	7(77.8%)	1(11.1%)	1(11.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究活動（口頭発表）	6(66.7%)	2(22.2%)	1(11.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究活動（専門書・論文講読）	8(88.9%)	1(11.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究活動（ゼミ・授業）	5(55.6%)	3(33.3%)	1(11.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)

理工系の専門分野では、人文・社会系と比べて日本語能力の必要度はやや低く捉えられていることがわかる（表9）。どの場面においても「必須」という回答の割合は人文・社会系より低かった。しかし、大学における諸手続き、日常生活一般、研究室でのコミュニケーションの3場面では、「必須」「できた方がよい」という回答が75%を超え、基本的な日本語能力の必要度は高く捉えられていると言える。研究活動については、論文作成、口頭発表、専門書・論文講読の3つの場面で「必要ない」という回答がやや多かった。このうち、口頭発表の能力については、「必須」「できた方がよい」を合わせた回答数が「少しできればよい」「必要ない」を合わせた回答数を少し上回っており、話す力の必要度は、読む力、書く力と比べてやや高いと言える。読む力、書く力の必要度が低いのは、理工系の場合、特に国際学会への論文投稿は英語による場合が多く、それがこの結果に影響していると思われる。研究活動のその他として、「野外調査（できた方がよい）」「カタログによる注文（できた方がよい）」「講習会に出る（できた方がよい）」が挙げられていた。

表9 指導教員が考える留学生の日本語能力必要度（理工系）

	必須	できた方がよい	少しできればよい	必要ない	無回答
大学における諸手続き	4(23.5%)	10(58.8%)	2(11.8%)	1(5.9%)	0(0.0%)
日常生活一般	3(17.6%)	12(70.6%)	0(0.0%)	1(5.9%)	1(5.9%)
研究室でのコミュニケーション	3(17.6%)	10(58.8%)	4(23.5%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究活動（論文作成）	3(17.6%)	3(17.6%)	5(29.4%)	6(35.3%)	0(0.0%)
研究活動（口頭発表）	5(29.4%)	5(29.4%)	1(5.9%)	6(35.3%)	0(0.0%)
研究活動（専門書・論文講読）	3(17.6%)	5(29.4%)	2(11.8%)	6(35.3%)	1(5.9%)
研究活動（ゼミ・授業）	6(35.3%)	6(35.3%)	2(11.8%)	3(17.6%)	0(0.0%)

医薬系の専門分野も理工系とほぼ同様の傾向を示した（表10）。人文・社会系と比べると日本語能力の必要度はやや低く捉えられ、どの場面においても「必須」という回答は人文・社会系よりも割合が低かった。しかし、理工系と同様に、大学における諸手続き、日常生活一般、研究室でのコミュニケーションの3場面では、「必須」「できた方がよい」という回答が75%を超え、基本的な日本語能力の必要度は高く捉えられている。理工系と異なる点は、研究活動の4つの場面で「必須」という回答がなかったことである。研究活動の各場面については、回答の分布が理工系とやや異なっている項目があるものの、概ね同様の傾向を示していると言ってよいだろう。研究活動のその他として、「実験についての討論（必要ない）」が挙げられていた。

表10 指導教員が考える留学生の日本語能力必要度（医薬系）

	必須	できた方がよい	少しできればよい	必要ない	無回答
大学における諸手続き	2(12.5%)	10(62.5%)	4(25.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
日常生活一般	3(18.8%)	9(56.3%)	4(25.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究室でのコミュニケーション	3(18.8%)	10(62.5%)	3(18.8%)	0(0.0%)	0(0.0%)
研究活動（論文作成）	0(0.0%)	6(37.5%)	4(25.0%)	6(37.5%)	0(0.0%)
研究活動（口頭発表）	0(0.0%)	9(56.3%)	2(12.5%)	5(31.3%)	0(0.0%)
研究活動（専門書・論文講読）	0(0.0%)	4(25.0%)	5(31.3%)	7(43.8%)	0(0.0%)
研究活動（ゼミ・授業）	0(0.0%)	11(68.8%)	3(18.8%)	2(12.5%)	0(0.0%)

回答の「必須」「できた方がよい」を日本語能力の必要度が高いもの、「少しできればよい」「必要ない」を日本語能力の必要度が低いものとして、分野間で回答に有意差が見られるかどうか調べてみると（フィッシャーの直接確率による）、人文・社会系と理工系の間では、論文作成、専門書・論文講読の2場面で有意差が見られ（いずれも $p < 0.05$ ）、人文・社会系と医薬系の間では、論文作成、口頭発表、専門書・論文講読の3場面で有意差が見られた（それぞれ、 $p < 0.05$, $p < 0.05$, $p < 0.01$ ）。理工系と医薬系の間には有意差は見られなかった。アカデミックな場面での読み書きの力についての必要度の認識は、文系の指導教員と理系の指導教員とで差があると言えるだろう。

8.3 日本語研修コースに対する指導教員のニーズ

8.3節では、日本語研修コースに対する指導教員のニーズについて見る。

まず初めに、指導学生に日本語研修コースを受けさせたことがある指導教員（全回答者42人中21人）に、日本語研修コースを受講させた理由と、日本語研修コースを受講して成果があったと思うかどうか

について尋ねた。日本語研修コースを受講させた理由については、8つの選択肢から該当するものを選んでもらった（複数回答可）。表11は、その回答結果をまとめたものである（上位2位までの回答を網かけで示した）。分野によっても異なりがあるが、全体的では「日本での生活に必要」が一番多く、「講義やゼミで必要」と「本人が希望」が同率でそれに続いた。指導教員・留学生の双方が、日本での留学生活において基本的な日本語の習得が必要であるという認識を持っているということがうかがえる。

表11 日本語研修コースを受講させた理由

	人文・社会	理工	医薬	全体
文部科学省指定	0	0	5	5
研究活動で必要	4	3	0	7
講義やゼミで必要	4	5	1	10
コミュニケーションに必要	1	5	3	9
大学院受験で必要	3	4	0	7
日本での生活に必要	2	6	5	13
留学生本人が希望	1	5	4	10
その他	0	0	0	0

日本語研修コース受講の成果については、「とても成果があった」「まあまあ成果があった」「あまり成果がなかった」「全然成果がなかった」の4つから選んでもらった。表12に結果を示す。回答者のほぼすべてが「とても成果があった」「まあまあ成果があった」と答えており、受け入れ指導教員の目から見ても、日本語研修コースの受講によって一定の成果があがっていると認識されていることがうかがえる。

表12 日本語研修コース受講の成果

とても成果があった	まあまあ成果があった	あまり成果がなかった	全然成果がなかった	無回答
9	11	0	0	1

次に、すべての回答者に対して、今後留学生を受け入れた場合に、日本語研修コースを受講させる可能性があるかどうか尋ねた。42人の回答者のうち、38人が「受講させる可能性がある」、2人が「受講させる可能性がない」と答えた。残りの2人は無回答であった。また、「可能性がない」という回答の理由は、「他大学からの入学者が多い」「留学生の受け入れ予定がない」であった。さらに、「受講させる可能性がある」と答えた指導教員に対しては、どのようなレベルのクラスを受講させる可能性があるかも尋ねた。表13はその回答結果を示したものである。この結果を見ると、文系の分野では初級・中級レベルともにニーズがあるのに対して、理系の分野では圧倒的に初級レベルへのニーズが高いことがわかる。

表13 受講させる可能性があるレベル

	初級のみ	初級・中級	中級のみ	合計
人文・社会	0	6	1	7
理工	11	5	1	17
医薬	11	3	0	14
全体	22	14	2	38

日本語研修コースは、大学院入学を目指す留学生のために、専門課程への橋渡しを目的として開講している1日4コマ、15週間の日本語集中コースであるが、来日と同時に研究活動を開始する留学生の場合、研究室での研究活動に必要な時間の制約から、1日4コマの受講は難しいという場合がある。そこで、現在コースで開講しているコマ数について指導教員の意見を聞いた。表14、15にその結果を示す。この結果を見ると、指導教員の大半は今の開講コマ数でよいと考えているようだ。現在の開講コマ数が多いと考えている指導教員のほとんどは、1日2コマあるいは1コマであればよいとしており、そうなると、日本語研修コースの開講コマ数を変更するというよりも、専門課程への橋渡しを意図した集中コースである日本語研修コースではなく、全学向けに開講されている日本語課外補講の受講を勧めることになるだろう。また、杉谷キャンパスの指導教員からは「杉谷で開講されれば行かせる可能性があるが、五福まで行くように指導はしない」というコメントが得られており、このコメントは三大学が統合してできた新富山大学の中での留学生センターの役割を考える上でも重要なコメントであると考えられる。

表14 希望する開講コマ数（初級）

	今のままでよい	少ない方がよい	その他
人文・社会	5(83.3%)	1(16.7%)	0(0.0%)
理工	11(73.3%)	4(26.7%)	0(0.0%)
医薬	10(71.4%)	2(14.3%)	2(14.3%)
全体	26(74.3%)	7(20.0%)	2(5.7%)

() は受講可能性があると答えた人数(35人)中の割合
「少ない方がよい」を選んだ解答者の希望コマ数：2コマ6人，1コマ1人
その他：夜間授業，早朝・深夜・休日

表15 希望する開講コマ数（中級）

	今のままでよい	少ない方がよい	その他
人文・社会	6(85.7%)	1(14.3%)	0(0.0%)
理工	4(80.0%)	1(20.0%)	0(0.0%)
医薬	2(66.7%)	1(33.3%)	0(0.0%)
全体	12(80.0%)	3(20.0%)	0(0.0%)

() は受講可能性があると答えた人数(15人)中の割合
「少ない方がよい」を選んだ解答者の希望コマ数：2コマ2人，1コマ1人

研究活動を進めながら日本語を習得しようとする留学生にとっては、ほんのわずかな時間も無駄にできない状況であり、キャンパス間を移動する必要がある杉谷キャンパスの留学生にとっては、日本語研修コースは受講しにくくなっていると言える。現状の人員やコストの面から考えても杉谷キャンパスで同様のコースを開講することは非常に困難ではあるが、杉谷キャンパスの留学生が少しでも受講しやすい環境を整えられるよう、今後検討を進めていく必要があると言えるだろう。

次に、日本語研修コースでの指導内容について、どのような点に力を入れた指導を希望するか尋ねた。「日本語で論文やレポートが作成できる」「日本語で口頭発表ができる」「日本語の講義を聞いて理解できる」「ゼミでのディスカッション等に日本語を用いて参加できる」「指導教員と日本語でやりとりができる」「研究室の他のメンバーと日本語でやりとりができる」「大学での手続き等を円滑に進めることができる」「日常生活が円滑に送れる」「その他」の9つの項目から、希望する度合いの高いものから順に5つまで選んでもらった。回答の1位を5点，2位を4点，3位を3点，4位を2点，5位を1点として集計したものが表16である（上位2位までの回答を網かけで示した）。

人文・社会系では大学での学習・研究に必要な力の養成が希望されている。理工系では、論文やレポートの執筆に必要な力の養成はそれほど求められていないが、基本的な日本語の力に加えて、講義の理解、ゼミでのディスカッション、指導教員や研究室のメンバーとのやり取り、口頭発表といったアカデミックな活動に参加するための力の養成も求められている。医薬系では、基本的な日本語力の養成への要望が強く、研究室でのメンバーとのやり取りに必要な日本語力の養成がそれに続いている。全体的には、基本的な日本語力の養成への希望が圧倒的に高いという結果となった。その他で希望されている項目は、研究計画書、志望理由書の書き方指導（5位）、調査などの資料・データ収集（4位）であった。また、コメントとして「日本語の講義を理解するためには、日本語一般と日本語の専門領域固有語を理解する必要がある、これに関する能力養成は日本語研修の範囲を超えている」という記述も見られた。

表16 日本語研修コースで希望されている指導内容

内 容	人文・社会	理工	医薬	全体
論文・レポート	24	9	0	33
口頭発表	8	21	0	29
講義	32	43	19	94
ゼミでのディスカッション	7	31	15	53
指導教員とのやり取り	9	24	20	53
研究室のメンバーとのやり取り	5	22	40	67
大学での諸手続き	12	25	23	62
日常生活	15	38	54	109
その他	3	0	0	3

8.4 日本語研修コース、留学生センターへの要望

8.2節、8.3節で見た質問以外に、日本語研修コースおよび留学生センターへの要望を自由に記述してもらった。その回答を以下に示す。

<日本語研修コースへの要望>

(日本語研修コース修了者の指導教員)

- ・日本の学生との交流で本人が不都合を感じなければ問題ない。
- ・研究計画書、志望理由書の書き方等についての指導が求められるように思われます。
- ・専門書の読み方、母国語と日本語と英語のつながりをおしえてほしい。
- ・夫婦や子供連れで留学している場合、夜間コースを設けて主婦等を対象とした語学コースを設けてはどうか。私はドイツで留学生生活を送ったが留学生に限らず主婦も参加していた。
- ・日本語能力試験の受験も勧める。
- ・留学生の目的は研究であるため、その時間が取れるよう、研修の時間を設定頂きたい。しかしながら、研究のディスカッションの中で、語学力不足により方針が理解できなかつたり、勘違いをする様では不足。

(日本語研修コース受講者以外の留学生の指導教員)

- ・一般に初めは日本語を学ぶ意欲が旺盛なのですが、壁にぶつかると、あるいは研究配属後、次第にあきらめる様になります。少しずつでもあきらめず向上する努力を続けるよう指導してください。
- ・杉谷でも集中的にやってもらいたい。レベルをもう少し細かく分けて行ってもらいたい（個別指導など）。
- ・研究室でのコミュニケーションのみを考えた場合、名詞は英語で表現できるので、動詞の変化（現在、過去、未来、希望）をきちんと教えていただきたいと思っています。

- ・現在の一日4コマ体制では、学生が習った日本語を实际使う時間が少なく、他の専門分野の学習時間も確保できません。さらに、一日4コマも受講すれば集中力も低下するので少しも効果的ではありません。したがって、一日2コマで十分です。
- ・病気や事故のとき、救急車や医療機関への連絡の対応が取れるようにしていただくとありがたい。
- ・研究分野的に言えば、口頭発表、ディスカッションを日本語で行うよりも実験を先に進めるほうが重要。研究室において日本人学生と最低限の一般的会話さえ可能ならばよく、他は英語のほうが好ましい。（研究分野によって大きく異なると思われます）
- ・今迄数人の留学生を見ていると、研究関連の会話を日本語でできるようになるのは早い人で博士課程修了前後。だから、この研修は日常会話の手ほどきでよいと思う。
- ・杉谷から五福に出かけることになるため、時間のロスとバス代等の経費がかかる。杉谷キャンパスで行えるコースを充実させてください。

<留学生センターへの要望>

(日本語研修コース修了者の指導教員)

- ・日本語教育を主眼とされる留学生センターのあり方には大変不満です。文科省の国際プログラム等へのアプライするための支援組織として改変していただきたい。あるいは「外国人日本語教育センター」と改名されるべきです。
- ・1年以上の長期の留学生に対して日本語教育は必要。留学生センターの今までの日本語研修コースは十分機能している。研究指導・講義等を英語のみで行えばよい、という考え方は正しくない。留学生は日本との交流の使節として迎えることが大切であり、そのためにも日本語が必要と思う。
- ・現在のところ、特に申し上げることはありません。ただ知的好奇心と熱意に富みかつ意識のある学生に育成・教育されることを切望いたします。話すことももちろん重要ですが、「書く」（レポート・論文）ことにいっそう重点を置いてほしいと思います。それは、とくにレポートや発表での文章で、主客が不明確である（主語のない文章が多い）学生が目につくためです。大変ですが、よろしく願いいたします。
- ・就職活動に備えた、ビジネスマナーや日本の慣習についてのコースを設置してほしい。
- ・杉谷地区では留学生センターの活動が皆目知られていない。杉谷地区に同様の機関を設置すべきである。特に医薬系では研究室を離れて語学研修を受ける時間がとれず、五福地区と隔絶している。
- ・今回2名の中国からの留学生に日本語研修コースを受講してもらい、先生方の指導により十分なコミュニケーションが取れるまでに至り感謝している次第です。一部研究・実験に時間が取れず留学生への精神的負担が感じられましたが、日本人学生の時間外補助（夜間、土日）により、何とか乗り越えた感じです。そのなか、誤解を生まない指導ができているのも、本コースのお陰と感謝しています。今後も積極的御指導とサポートのほど、よろしくお願い申し上げます。
- ・今まで以上に日本語教育を充実していただきたいと思います。円滑に大学院生の募集と教育をするために、日本語予備教育はとても重要です。
- ・大変熱心に指導されていることに感謝しております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(日本語研修コース受講者以外の留学生の指導教員)

- ・研究指導の際、コミュニケーションに苦勞しています。これは非常に難しい問題ですね。既に研究室で確立した手法で機械的に仕事を進め、予定通りうまくいく時は良いけれども、少しでも新しいことを工夫しながらとか困難を乗り越えるためにいろんな選択肢の中から道を選ぶ時の微妙な議論には非常にむずかしいと感じています。日本語が困難だからといって英語でといってもまた困難なものです。場合によっては英語教育をしてもらった方が良いかもしれません。今年はエジプト人（博士課程）が来る予定ですが、28才程なので、また、既に研究者としてはある程度出来上がっている人と思われる人なので日本語はどうでも良いという気もします。何か良い意見や明確な希望を出

せると良いのですが。

- ・今後ますます留学生センターの役割は重要になっていくことと思います。全学の中でも鍵となるセクションであると思いますので、より一層の充実した活動を期待しています。
- ・よろしくご指導ください。
- ・留学生用宿舎の充実に一層努めていただきたい。
- ・今年3月に卒業していった卒業生への多くのご支援に感謝いたします。
- ・語学への“なれ”は個人差があり、話をすることが好きな人は上達速度が速い。テレビの放送を教育材料にすると、日本語能力のチェックにある時期から使えるかもしれない。

9 おわりに

富山大学留学生センターは設置から10年が経過した。大学院入学前予備教育・日本語研修コースも、2008年3月には第19期生を送り出し、これまでに文部科学省からの配置学生、学内措置による受講者を合わせて132人が修了している。2009年9月には第1期の開講から丸10年を迎えることになる。この10年の間に、コースを取り巻く状況も変化し、それに合わせてコースの内容等も少しずつ変えてきた。

2008年度は、日本語研修コースと日本語課外補講の合同開講クラスが増え、特に中級クラスは午前中の10コマすべてを日本語課外補講との合同クラスとして開講することとなった。ニーズや出席の要件などが異なる2種類の学生が同じクラスで学ぶことになったが、現時点では、それぞれのプログラムの受講者の満足度が高くなるような授業内容が提供できているとは言えない。2009年度は日韓共同理工系学部留学生プログラムによる留学生の受け入れも予定されており、その学生は来日後、学部入学前の予備教育として日本語研修コース中級クラスを受講者することになる。つまり、日韓プログラムの学生にとっても満足度が高くなるような授業内容を提供し、彼らが学部に進学してから授業についていけるだけの日本語力を養成しなければならず、中級クラスのカリキュラムの整備が急務であると言えるだろう。

今後も、国の留学生受け入れ政策や大学としての留学生受け入れ方針の変化に合わせて、日本語研修コースを取り巻く状況は変化していくことが予想される。また、それにともなって、指導教員や留学生のニーズも変わる可能性が十分にある。さまざまな変化に瞬時に対応し、より中身の濃いコースが提供できるように、センター教員、コース担当非常勤講師をはじめ、受講者の指導教員や事務系職員とも連携を密にして指導にあたっていきたい。